

北のカナダが今ホット —ケベック問題やイヌイット



筑波大学 教授 今泉 容子

① 400年目を祝われた人

ディズニー映画が初めて、実在の人物を主人公にしてアニメをつくったのは、15年前の1994年のこと。つくられたアニメ映画は、『ポカホンタス』だった。ポカホンタスは北アメリカの先住民パウアタン族の娘で、イギリス人ジョン・スミスの著書に記述がある。ジョン・スミスといえば、1607年に現・アメリカ合衆国ヴァージニア州へ探検船でやってきたイギリス人で、植民地ジェームズタウンを建設したことで知られている。まだ27歳だったスミスが、現地であやうくパウアタン族に殺されそうになったとき、身を投げ出して命乞いをしてくれたのが、ポカホンタスだった、と彼は書き残している。

スミスのヴァージニア入植とおなじ時期の1608年に、フランス人探検家サミュエル・ド・シャブラン（図1）は、ヴァージニアよりずっと北にある現・カナダ連邦ケベック州のセントローレンス川流域に、ヴィル・ド・ケベックを築いた。これが、ケベック市のはじまりであり、カナダのはじまりである。この1608年からちょうど400年後にあたる2008年に、ケベック市制400年の記念行事がケベック市で、そしてカナダ全土で催された。シャブランはアニメ映画のヒーローにこそならなかったが、カナダで400年目の祝賀をうけて、時の人になった。



図1 シャブラン肖像、ロンジャット作(出典『フランス大衆史』6巻、p.190)

② ケベック州 vs カナダ連邦

ケベック市およびケベック州では、シャブランによる入植のときから、フランス系が優位を占めてきた。ケベック州議会は1974年に、フランス語を公用語とす

る「公用語法」を定めた。1976年には、フランス系の文化・歴史に誇りをもつ「ケベック分離主義政党」（ケベック党）がケベック州議会選挙に勝った。彼らはフランス語の優位を再認識したばかりでなく、カナダ連邦から分離独立することを構想したのだった。これが「ケベック問題」であり、ケベック州 vs カナダ連邦という対立は、カナダの頭痛の種となった。

ケベックの主権（独立）に関して、ケベック州は「住民投票」を1980年と1995年に行った。いずれも反対が多かったため、ケベックの独立は起こらなかったのではあるが、2度目の住民投票では賛成の49.4%が、反対の50.6%にきわどく迫った。これには、カナダ連邦政府は心安らかではなかった。ケベック州に一方的に独立されては困るから、独立の条件を列挙した「クラリティ法」を2000年に連邦会議で可決させて、独立しづらい状況をつくりあげたのである。

もちろん、ケベック州に在住するすべての人が、分離しがっているわけではない。じっさい、住民投票の結果が出たとき、独立に反対する人々は、国旗やプラカードを掲げて歓喜した。その様子を撮った写真が、『世界の諸地域NOW 2008』（以下、資料集）のp.128に載っている（図2）。プラカードには「親愛なるケベックのフランス系住民へ、合体し続けましょう」「分離はダメ」などと、フランス語で書かれている。



図2 『世界の諸地域NOW 2008』 p.128

ケベック州議会で首位に立つ自由党も、カナダの一州としてとどまる考えである。もし、この自由党の議席数を、ケベック党の議席数が超えたら、カナダの地形や経済や文化が変わるかもしれない。そのような可能性をはらんだケベック州総選挙が、2008年12月8日に行われた。結果は、定数125議席のうち、自由党66、ケベック党51。自由党が3連勝を果たしたため、カナダはいまもカナダのままである。ケベックの独立は、今後も容易には進まないだろう。

3 フランス系とイギリス系

ケベック州から首都オタワへは「アレクサンドラ橋」を渡って、徒歩で簡単に行ける（図3）。大英帝国時代に、ケベック市が首都の候補にあがったこともあった。ほかに、モントリオール、トロント、キングストンも候補にあがったが、1858年に宗主国のヴィクトリア女王が、それらを却下して、仏英のいずれにも偏りのないオタワを選んだのだった。

オタワは当時も今も、大都市ではない。東京からの直行便はなく、大都市トロントかヴァンクーヴァーへジャンボ機で飛んだあと、近・中距離用の小さいエアバスに乗り換えるしかない（図4）。ときには、いまだき珍しいタラップを降りさせられるため、ほんとうに一国の首都へ向かっているのか、と疑わしく思う人もいよう。

オタワが位置するオンタリオ州は、英語を公用語と定めている。カナダ連邦は「公用語法」を1969年に制定し、フランス語と英語の双方を公用語と定めたのであるが、各州は独自の公用語を定めることができるのだ。カナダの大半の州は、英語を公用語としている。各州の二言語の使用比率は、一目でわかる色分けチャート（資料集p.128）で確認するとよい。



図3 アレクサンドラ橋、ケベック州からオタワへ



図4 東京からの直行便がないオタワ



図5 多文化主義が学生壁画にも

4 イヌイットのためのヌナブト準州

フランス語と英語は、たしかにカナダの二大言語であり、フランス系とイギリス系は二大民族である。しかし、「多文化主義」というカナダの政策が示すように、仏英のほかに多くの移民や先住民が存在し、権利を守られている。

とくに、かつてエスキモーとよばれたイヌイットは、その知名度が急速に高まっている。1993年にはイヌイットとカナダ連邦のあいだに協定が結ばれ、1999年にイヌイットに運営が委ねられたヌナブト準州が創出された。また、イヌイットだけが登場し、イヌイット語だけが話されるという画期的な映画『氷河の伝説』（ザカリアス・クヌク監督）が、カナダ映画として2001年に公開された。この映画は、カンヌヤジニー（カナダのアカデミー賞）など主要な映画賞を20も獲得し、ノミネートも10にのぼった。

イヌイットの生活を垣間見るには、資料集のp.128を開くとよい。イヌイットが氷河に穴をあけて魚をとっている写真は、彼ら独自の生活形態が今日でも続き、カナダ連邦がそれを保障していることを語るだろう。

カナダは厳しい自然の「北」に、広大な大地をもつばかり（ほかには何も無い、というニュアンス）といわれた。しかし、この「北」は今、ホットである。グローバルな規模で民族問題が浮上している世界において、ひと足先に多文化主義を打ち出したカナダは、先頭を走っているといってもいい。多文化主義がカナダの学生たちの意識にまで浸透していることは、オタワ大学の寮の学生壁画に見られる。その壁画では、丸い地球の下で、異文化を表象する人たちが、仲よく肩を組んでいるのである（図5）。